

滋賀・穴太遺跡^{あのう}

- 1 所在地 滋賀県大津市下坂本一丁目・唐崎四丁目
- 2 調査期間 一九八二年(昭57)五月～一九八三年三月
- 3 発掘機関 滋賀県教育委員会・財滋賀県文化財保護協会
- 4 調査担当者 林 博通・吉谷芳幸
- 5 遺跡の種類 寺院・官衙・集落跡
- 6 遺跡の時代 縄文後期～平安時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(京都東北部)

穴太遺跡は比叡山麓から琵琶湖にかけて広がる大津北郊の扇状地の一画にあり、縄文時代から平安時代にわたる広大な複合遺跡である。この地は景行・成務天皇の高穴穗宮の伝承地であり、『延喜式』記載の北陸道第一の駅である穴太駅家推定地でもある。これまでの調査で、扇状地の中央付近からは白鳳期の寺院の一郭と瓦窯一基、古墳時代の方形周溝墓、竪穴住居跡な

どが確認されている。この遺跡を縦断する形に国道一六一号バイパス建設が計画され、前年度から本格調査を始めたが、当該地は遺跡の東北端、扇状地の裾部に当る。この調査区では地表下四～五mに縄文後・晩期の遺構面、三・五～四mに六世紀末～七世紀中頃の遺構面が認められ、当時の湖岸に近い低湿地に営まれた集落跡と解される。

木簡の出土したのは上から第三層目の六世紀末～七世紀初頭の面で、集落内に設けられた小さな浅い溝から検出された。この集落はその北端を素掘りの溝で画し、その内側に柵をめぐらし、さらにその内側に建物を配しているが、柵に沿った空間地には桃の木が植栽されている。建物の大半は掘立柱建物であるが、中に礎石建ち建物、それを建て替えた土台建ち建物、切妻大壁造り住居など特異な建物が混じている。切妻大壁造り住居は幅約1mの溝を一边8m前後の方形にめぐらし、その溝底に三〇～五〇cm間隔で間柱を配し、向き合う二辺の中央に一まわり大きな棟持ち柱二本を深く立て、その後すぐ溝を埋め、土壁を四面にめぐらせた家である。一边の中央には入口を設け、床には粘土を敷いて土間としている。この建物の構造や礎石を用いた建物の存在、この遺跡のすぐ山手にある横穴式石室の構造などから渡来系集団にかかわる集落かとみられる。

8 木簡の釈文・内容



• □ □

204×(20)×6 059

表面の第二字は「サ」冠の文字とみられる。表裏とも墨痕は認められるが判読はできない。木簡の側辺の一部は欠損している。下半は一方から切り込んで幅をせばめ、さらに先端を二次的に削ってとがらしている。また、中央近くには一孔を穿っている。

本木簡は判読はできないものの六世紀末〜七世紀初頭のもので、木簡としては最も古い事例に属し、しかも、集落跡から出土した点が注目される点である。この集落を特異な建物をもつ集落、すなわち、渡来系集団の集落と解釈することによって、この木簡の存在が理解されよう。

(林 博通)